

クリニカルパス契機のチーム医療 -薬剤師活躍のチャンス到来-

Our fellow pharmacists, please ask what together we can do for the patients.:Clinical pathways have brought the opportunity.

○山中 英治¹(¹市立岸和田病院外科)

「宝の持ち腐れ」病院薬剤師に対してかつて抱いていた印象である。なぜ豊富な知識と技術を持ちながら十分に臨床現場で活躍する場が無いのか？だが、換言すれば「人材の宝庫」である。それが近年の院外処方化と、パス導入を契機としたチーム医療の推進により人材活用の機会が巡ってきた。当院ではまず EBM が求められるパス作成と改良で、薬剤師が抗生物質や輸液の適正使用に知識を発揮した。当然感染対策や栄養も絡むため ICT や NST でも薬剤師が必要とされメンバーとしてラウンドしている。外来化学療法センターでは医師のプロトコールを薬剤師がチェックし、混注もすることで飛躍的に安全対策が向上した。病棟ではコンプライアンスの低い患者やリスクの高い薬剤の管理投薬は薬剤師の仕事となり、全幅の信頼を得ている。まさか今時「医者に意見するなんて」とか「そんな責任のある仕事は困る」などと仰る前時代的な薬剤師はおられまい。責任の無い仕事にやりがいがあるであろうか？薬剤師のエキスパートがベッドサイドで経験を積みれば百人力である。急性期のハイリスクの臨床現場で、医師も看護師も薬剤師の活躍を切望している。当院では今や「薬剤師がいるから安心」「薬剤師に任せておけば大丈夫」そして「薬剤師のおかげで助かった」である。ただ、以前は「薬剤師」の前に「あの」が付いた。しかし最近「あの薬剤師」の後に「たち」が付いてきたことが嬉しい。薬剤師活躍の時代の到来である。